時々通信 参

ときどきつーしん

「時々通信」は、西広・社内報に時々登場する今どき全手描きの読みものです。

◉絵と文と筆耕
©.富山祥瑞（マーケティング部）、1998 10

今どき、ほぼ全手描きの印刷物って工程的には大へん効率が悪いので、敬遠にみかけなくなった。しかし、私が社会人となった、たかだか15年程前（1983年）まで、広告代理店でつくられる企画書の類は、全〜部、手描きであった。

便利重宝な明の利器「ワープロ」の社内導入にあたっての講習会が開かれたのは、入社して間もなくのこと。あっという間のワープロやパソコンによる書類化の普及は周知の通り。

でも、こうして手描き版下のスペースをいただき（しかも今回は二頁）、筆耕と同時に割付けも課せられるこの手法に、ローテクノロジーならではの緊張感を覚えるのである。

本日は、ローテク的道具（?）となってしまったのかもしれない「糊」の話と、やはりローテク（?!）、筆記具について語ってみたい。

糊

糊は、オフィス需要の定番『アラビックヤマト』（ヤマト社）に代表される透明系の［①液状糊］、家庭用として買い求められるケースも多くなった口紅タイプの［②固形糊］、そして古くからの［③でんぷん糊］とに規定分類されている。

このでんぷん糊、日常での呼び名は『つユキ糊』、これが関東地方へ行くと『ヤマト糊』となる。実はつユキ糊は大阪の不易糊工業の商品名で、ヤマト糊は東京のヤマト糊工業（現・ヤマト）の商品名。発生の地縁から、西はつユキ、東はヤマトと呼ばれるように……。このつユキ糊に固執していた郵便局でも近ごろ合成糊に移行してきたようだ。そこで「小学校の教材ではまだつユキが使われているのかナ〜？」と様子を伺うと、現役！嬉しくなる。でんぷんが主成分なので化学系に較べて安全というのがその理由。

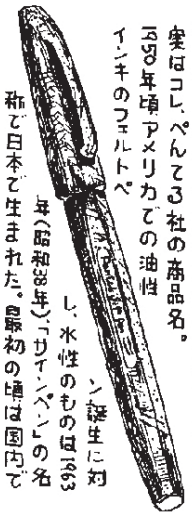
（ツルの色付近から塗った部分がわかる。しゃくとあるとプラスチックのカラーコーム。）

口紅タイプを私が初めて店頭で見たのは『プリット』という輸入品で、確かコクヨ社から発売されていた。ちょうど中学校に入学した頃で、1970年代初めのこと。つユキ糊が10円の時代に当初150円で出たと記憶している。カキの私には高価であった。間もなく100円で市場に出回るようになり、広く普及した。ここ数年近くほとんど値段の変わっていない商品である。

今どき、私は小学校の図工のようにつユキ糊をよく使う。紙の接着の耐久性においては最も信頼しているからだ。指で糊を伸ばすこともタイ。これが液状の化学系だと感触が悪い！

口紅タイプに関しごく最近知ったのだが、正しい使い方は少し斜めにして角を使って塗るものとのこと。私がやっていたように垂直に立てて使うと、ほら固形糊が縁に偏って、キャップが閉められなくなってしまう！

最近、よく使うようになったのが『サインペン』である。サインペンとは、水性マーキングペンの総称みたいに思われているが、実はコレ、ぺんてる社の商品名。1959年頃、アメリカでの油性インキのフェルトペン誕生に対し、水性のものは1963年（昭和38年）「サインペン」の名称で日本で生まれた。最初の頃は国内ではパッとしなかった。が、アメリカ『ニューズウィーク』誌（1964.8/4号）に「ジョンソン大統領が署名用に使っているペン」として報道され、アメリカで評判となり、逆輸入のかたちで認知された。国内では年賀状の宛名書きという用途で大ヒットした。



今は、個人から個人宛への年賀状にもワープロ印字のラベルが多用される時代、このペンも季節モノではないだろう。でも今でもロングセラー。「サインペンの青は誠に美しい発色である」という文章を何かの本で見て以来、私もこのサインペンの青の愛用者となった。思えば、新入社員として総務部から支給された道具の中に、ハサミ、定規と共に、このペンはあったのを鮮明に覚えている。青色の美しさに気付かなかったのは、支給品が、黒と赤だけだったから。

Sign Pen

◉ペンの側面には「サインペン」の刻印。

鉛筆も超ローテク製品の類かナ？——私は鉛筆を重宝している人種である。冒頭に、つい昔の企画書は手描きだったと記した。原稿をワープロ化するとすぐに分かるが、ワープロ立字は肉筆と見た目が同じ大きさでも文章の容量は多い。企画書の内容も、このワープロ化に誘惑化されて、気付かないうちにゼイ肉が付いてきたのではないか。そこで考えたのが、8Bの鉛筆を使い、仕上がり企画書サイズの紙に目一杯のモト原稿を先ず作るというもの。この小さく書こうと頑張っても大きな文字しか得られない当手法は、情報の圧縮化が自然に図れる。こうして生まれた企画書サイズ一杯のモト原稿も、見た目が同じ大きさのフォントでワープロ化されると、少し迫力のある、そして紙面の整った企画書となる。手描き時代の雰囲気を少し残しつつ、工程的な効率を少し考えた「秘伝」。

通常で売られている最高に柔らかい鉛筆は6B、これでもOK。8Bは、東京・銀座の月光荘オリジナルで国内で最も柔らかな芯の鉛筆。

何と8B

付録である。筆鉛の話ついでに「消しゴム」についての小話をひとつ。最近では、JISの規格（日本工業規格）マークの無い消しゴムも増えてきた。しかし代わって、安全管理のために、日本字消工業会が独自に制定したのがクリーンマーク。JISは消しゴムに香料の使用を認めていない。そこで香りスリの消しゴムであってもJISと同じ試験に通ったという印。中央の数字は生産工場の登録ナンバーで、OEM製品でも判明する。

クリーン 06 日本字消工業会

※罫線は上記に紹介の8B鉛筆で得られたものを版下とした。